

余裕を生んで気づきをもたらす スローな乗り物

欧州の乗り物をヒントに 低速の電動カートに着目

—初めにご経歴を教えてください。

三重野：2003年に国土交通省に入省し、公共交通・観光・地域政策を担当しました。14年から3年間は、出向先の京都市産業観光局で観光戦略担当を務めています。当時はオーバーツーリズムが言われ始めた頃で、観光地での交通手段の不足を実感していました。

かつてヨーロッパの観光地でプッチャー(ミニ列車)に乗り、とても素敵な体験だったので、日本でも同様の乗り物を走らせたいと思い続けてもいました。そんな時、国内で電動カートの走行実験が始まったのを知り、視察に赴いたのです。この時のカートが、後に私が命名した低速の乗り物「グリーンスローモビリティ」、通称「グリスロ」との出合いです。これはいいとプロジェクト化を企画提案し、18年から国として普及を進めることに。現在は国交省

を離れましたが、このモビリティを定着させるための旅振り役として、昨年「グリーンスローモビリティ協議会」を設立し、会長をしています。

—「グリーンスローモビリティ」の特徴を教えてください。

三重野：「時速20キロ未満で公道を走ることができる電動車を活用した小さな移動サービス」と定義されています。車両はカート型とバス型の2タイプがあり、席数は4人乗り以上で最大15、6席程度。ドアや窓がない開放的なつくりが多く、対面座席の車両もあります。

利用目的は大きく分けて生活交通用と観光交通用があり、東京・池袋駅周辺や栃木・日光など、本格導入例は100を超えるといわれています。約8～10分で歩けるくらいの、コミュニティバスよりも狭い範囲を、ゆっくりと走るのも特徴です。

生活交通用は、高齢者が多い住宅団地の中や、自家用車の少ない離島などを

走っていて、免許返納後のシニアの足にもなっています。運営は交通事業者のほか、地元自治会や町内会、NPOが行っています。観光交通用は、歩くには広すぎる観光地や点在する観光スポットの周遊に利用されていて、観光協会が運営し、地元企業が運行受託しているケースが多く見られます。

「遅い」とは異なる 「スロー」がもたらす豊かさ

—グリスロの目付が親とのことですが、「スロー」にはどのような思いを込めたのでしょうか。

三重野：小型の乗り物は他にもありますが、「スロー」を主張するのはこれまで日本にほとんどなかったと思います。

高度経済成長を経て、世の中は物質的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさを求めるようになりました。交通でも、経済性や速さ、技術革新のみならず、人と人がつながる時間や空間を考えられないか。「スロー」というベクトルの、レトロでアナログな乗り物を選択肢として示すことが、閉塞感のある日本社会にとって1つの解になるのではと考えました。

「スロー」は「遅い」と異なります。「遅い」は他者と比較した状態ですが、「スロー」はあえて時間を取った状態。そこからは余裕が生まれ、他の人や自然と触れ合う時間ができて、豊かさが生まれると思うのです。

例えば、自動車に乗っているときの速度



グリーンスローモビリティ協議会 会長

三重野真代さん

みえの・まよ／京都大学経済学部卒業、ロンドンスクールオブエコノミクス(LSE)都市政策修士号取得。武蔵野大学経営学部・特任教授、東京大学公共政策大学院交通・観光政策研究ユニット・特任准教授、一般財団法人運輸総合研究所・客員研究員も兼務。2003年に国土交通省へ入省後、京都市産業観光局観光MICE推進室担当部長、復興庁企画官などを経て、現職。編著に「グリーンスローモビリティ 小さな低速電動車が公共交通と地域を愛える」(学芸出版社)。



左／オーストリアを訪れたときに出会ったアプトラン。遊園地の乗り物のようにワクワクしたが、グリスローモビリティ導入を主導する原体験になったという
右／日光を走るグリスローモビリティは、観光客の回遊性を高めるための観光交通として利用されている

と徒歩の速度では、見えるものや感じるものと、考えることが違うもの。グリスロのようなゆっくりと走るオープンな移動を体験すると、多くの人が新たな気づきを得るのではないかと思います。

—グリスロの車内では、運転手や乗客の間にコミュニケーションが生まれやすいそうですね。

三重野：どの地域のグリスロに乗っても車内で言葉を交わす様子を目にします。運転手さんが乗客に声をかけたり、乗り合わせた高齢者と親子連れの方の会話を耳にしたり。同じ地域の住民であることも多い運転手や乗客のローカルなトークは、聞いているだけで楽しいもの。狭い車内や距離が近い対面の座席では自然と目も合いますし、思わず会話したくなるでしょう。日本では、公共の場では静かにすることがマナーだと教育されますが、グリスロに乗ると、人は自然に言葉を交わしたくなるのだと感じます。

開放的な車両も、気持ちをオープンにさせます。体全体で風を感じ、商店街のロッケの香りが漂ってきたり、鳥の声が聞こえてきたり。外の環境を体感することができます。また、遊園地の乗り物もそうで

すが、移動し出す瞬間は「わあ」と心が躍るもの。まるで、止まっていたまちが動き出すかのような感動を、乗客みんなで共有できる一体感もあります。

—グリスロが、乗り合わせた人たちのコミュニケーションのきっかけになる理由がよく分かりました。

三重野：先日話を聞いた運転手の方は、奥様を亡くし家にこもりがちだった独り身の高齢男性でした。グリスロに関わり、外へ出てスタッフや乗客とつながったことで、地域への愛着が深くなった様子でした。グリスロは、回遊することで地域の見守りの役割を果たしていたりもするんですよ。

また、グリスロのルートの多くは、町内を1周して同じ場所へ戻ります。そのため、目的地へ向かう手段としてではなく、気分転換のために乗車する人がいるのも特徴です。グリスロは、普段の生活ではあまり体験することのない時速20キロ未満という速度。足腰に自信がなくなったシニアや小さなお子さん連れの方には、ランニングやサイクリングのような心地よい疾走感を楽しめる効果があるのではないのでしょうか。

一方で、日常的に鉄道などを使い高速移

動している方にはゆっくりだと感じられる。さまざまな人に新鮮味がある速度だと思うのです。

「大したことじゃない」何かに人は幸せを感じる

—グリスロの速度が生む効果が、興味深いのです。他にはどんなことがありますか。

三重野：周囲の情報や様子に気づきやすくなるという効果があります。鉄道だとすぐに通り過ぎてしまい、目に入っても記憶に残りにくい。対してグリスロは情報を咀嚼できるスピードですから、お店の小さな看板にも気づけます。普段意識しない外の環境からのインプットがあり、ハッとする気づきがある。こんな場所があったのかと感じ入る余地が生まれ、寄り道をしてみようと思えるのではないのでしょうか。

それに、自転車や電動スクーターなど自分で運転する乗り物では、安全確認に気を取られ景色を見る余裕がありませんが、グリスロには運転手がいるので、落ち着いて周りを楽しむことができます。

—グリスロの利用を推進するための鍵はどこにありますか。



島根県松江市で、高台にある団地の住民に対する移動支援事業として、社会福祉法人みずうみによって運営されているグリスロ「リ・ホープ」。
病院や公共施設、買い物へ行くための地域住民の足として親しまれている

三重野：新しい乗り物への警戒心の払拭には、口コミが一番よいと実感しています。初めての乗り物は、利用の仕方やどう乗るのが分からず、不安に思うもの。でも、誰かに誘われたり人の感想に触れると、利用しやすくなることが分かってきました。口コミが広がるよう、実際に乗ってもらう機会を提供することも重要です。運営地域によっては、エリア内の幼稚園生や小学生生に無料で乗ってもらっています。

地域密着型のグリスロは、乗る人にも乗らない人にも理解を得ることが重要です。グリスロのような乗り物が存在してもいい、いざとなったら自分も乗れるという感覚を持ってもらうために周知活動をして、乗る人と乗らない人を分けない取り組みをする必要があります。

グリスロに乗車した人は、みんなとてもいい事業だと言ってくれます。乗車体験前は運行に反対していた人が、自ら周りに宣伝してくれることもよくあるんです。こんな風に人びとを魅了する理由は、シンプルさにあると考えています。

移動するだけではなく、人と話したり、周りをゆっくり見たり。一見大したことではないですが、大したことではないものを味わう機会が、日常では意外とないのです。その「大したことではない」何かに、実は

私たち人間は幸せを感じる生き物なのではないでしょうか。

毎日同じであるべき移動と そうでない移動を分けて考える

—「大人数を、はやく、遠くまで」運ぶのが鉄道ですが、その対極にあるグリスロの視点から見たとき、鉄道にはどんな可能性があるのでしょうか。

三重野：今はバス会社やタクシー会社が主体になっている「駅から先の移動」を、鉄道会社も担う時代が来るのではないかと考えています。最近、一般ドライバーが乗客を運んで、不足する移動手段を提供する「公共ライドシェアサービス」に、JR東日本が参入したというニュースもありました。鉄道会社が、駅から先の輸送を、グリスロも含めて考えていくといいと思います。

最近は乗り物や移動手段の意味で「モビリティ」という言葉がよく使われますが、この英単語は「移動性」という意味も含みます。海外の交通行政では、家からごみ捨て場に行く道のりや、子どもを外出先へ無事に送り届けるための親の送迎以外の代替手段までも「移動」として捉えます。本来、それら全てが移動であるという考えに深く

共感します。

海外の駅のように、改札がないといっても考えています。サイクルトレインに限らず、自転車やキックボードなどを列車にスムーズに持ち込める環境づくりができると、まちと鉄道がシームレスにつながれると思います。

一日常的に利用する鉄道が、乗ること自体を楽しめるグリスロのような存在になるためには、どうしたらいいのでしょうか。

三重野：例えば、地方では観光列車が走っていますが、通常の運行ダイヤの空いている時間に「こたつ列車」のようなイベント列車が走ってもいい。特急や急行のように効率性を求めない各駅停車で、その日だけ・その日ならではの、日々変化する車内アナウンスなどがあってもいいと思います。鉄道ではどんな状況下でも、毎日同じ移動を提供することが重要視されます。もちろんそれは大切な使命ですが、毎日同じであることが求められる移動と、そうでない移動とを分けて考えてもいいのではないのでしょうか。

また、車内に、沿線のまちでどんなことができるのかといったさまざまな案内があると、もっと多様な移動を楽しみたいと思ってもらえるかもしれないですね。